

# 『御巫本日本書紀私記』の成立に関する一考察

上 野 和 昭

『御巫本日本書紀私記』(以下『御巫本』と略称する)は、その奥書によれば、髪長吉叟なる人が應永三十五年(一四二八)に平野神主家より借りて書写したものである。内容は、日本書紀神代上下二巻から抽出した本文に、その訓を、主として万葉仮名で付したもので、書紀訓読上の資料として重視されている。また大部分の訓には声点が差されており、アクセント資料としても重要な位置を占める。筆者は先に『御巫本日本書紀私記声点付和訓索引』<sup>(2)</sup>を作成したが、本稿ではその間に問題となった点のいくつかについて、本書の成立という視点から考察してみようと思う。

## 一

すでに論じられているように、本書の成立過程には複雑な経緯が想定される。上下両巻の首・尾題および奥書については、

現在の二巻は、元来第二種(乙本)と第三種(丙本)とを合  
わせた三巻中の最初の二巻なりしを、いつしか第三巻を失ひ

たる為、その代りに、第一種(甲本)の本をその前に補ひて上  
中下の三巻となつて傳はりたるを、應永三十五年吉叟が書写し  
たるものなるが、後に更にその上巻が失はれて、中下二巻のみ  
現存せるものなるべし。(一) 内筆者補

という橋本進吉博士の解説に従う。<sup>(3)</sup>また、訓読法の立場から小林  
芳規博士は「康保私記」の可能性を示唆されたが、<sup>(4)</sup>筆者はむしろ  
全体を或るまとまつた講書ノートとは見做さないという考えをも  
つ。もちろん、「康保私記」を部分的に採用していることはあり  
得るであろうが、以下に述べる点からみるに、この『御巫本』は  
いくつかの資料を使って編集したものではないかと思われる。

『御巫本』の形式や仮名遣、仮名用字などについての研究は、  
大野晋博士、<sup>(5)</sup>西宮一民氏、<sup>(6)</sup>安田尚道氏らによってなされている。

安田氏は、訓の形式・各項目の間隔・一行の字詰・行末および  
万葉仮名の用字傾向などの観点から、全体を四部分にわけられ  
た。

大野博士は、『御巫本』の仮名遣などを検討され、その成立を天曆以後、さらには十一世紀以後とみておられる。

また西宮氏も仮名遣の検討から、本書は「平安中末期の祖本の姿をほぼ忠實に傳へてゐるものである」と結論された。

ところで、『御巫本』全体における訓注の万葉仮名字母とその使用頻度とを次に示す。なお、ここでは歌謡部分の万葉仮名は除外してある。それは本来書紀本文にあったもので、訓注の万葉仮名とは性格を異にすると思われるからである。数字は使用頻度を、( )内は連読符の場合の数(外数)を示した。\*印以下は、仮名遣の違例など特殊なものを記した。

あ 安 183 阿 52 (3) \*天 1  
 い 以 75 (4) 伊 75 (2) 依 1  
 う 宇 116 于 3 烏 1 有 1 羽 1 汗 1  
 え 衣 2  
 お 於 55 \*遠 22 乎 11 (1)  
 か 加 33 (14) 可 35 (1) 我 1 餓 1 軀 1 伽 1  
 き 支 136 岐 73 (3) 歧 48 (1) 化 7 (9) 紀 3 枳 2 (1) 疑 1  
 く 久 206 (4) 具 5 俱 3 苦 1 矩 1 九 1  
 け 介 65 (1) 計 3 氣 2 既 1 礙 1 該 1  
 こ 古 171 (12) 己 55 (7) 許 3 (1) 居 1 去 1 故 1 其 1 期 1  
 1 \*斯 1  
 さ 左 100 (1) 左 17 佐 12 (1) 佐 8 沙 2 坐 1  
 し 之 229 志 138 (3) 只 22 斯 2 茸 2 師 1 自 1

す 須 163 (7) 寸 6 酒 1  
 せ 世 39 西 9  
 そ 曾 88 索 1 楚 1  
 た 太 236 (14) 多 51 (5) 随 12 (1) 恒 1 他 1 大 1  
 ち 知 116 (2) 千 7 (1) 地 2 徴 2 智 1 \*余 1  
 つ 津 120 (4) 豆 93 (3) 都 5 川 5  
 て 天 84 旦 79 (1) 底 1 手 4  
 と 止 324 (12) 刀 8 等 6 度 6 首 1 戸 5  
 な 奈 227 (1) 那 8 難 2 難 1  
 に 余 224 (10) 仁 23 耳 2 二 1 而 2  
 ぬ 奴 32  
 ね 祢 23 子 5 \*禾 1  
 の 乃 326 能 4  
 は 波 229 (4) 巴 20 八 13 娶 1 \*摩 1 磨 1  
 ひ 比 203 (2) 非 9 備 1 \*以 4 伊 1 美 1  
 ふ 不 66 布 62 矛 1  
 へ 倍 91 部 6  
 ほ 保 86 (1) \*乎 3  
 ま 末 202 (4) 万 112 (7) 床 7 摩 3  
 み 美 189 (4) 三 12 絺 2 未 4 微 1 見 4  
 む 牟 158 武 2  
 め 女 81 米 10 免 6 咩 2  
 も 毛 125 (7) 母 4 裳 3

や 也 99 耶 5 夜 2 乎 1 \*衣 1

ゆ 由 32

江 3 \*衣 1 倍 1 恵 1

よ 与 68 世 1

ら 良 177 (2)

り 利 216 (1) 里 37 (1)

る 留 145 (2) 流 40 (2) 屢 1

れ 礼 84

ろ 呂 75 (1)

わ 和 42

ゐ 為 8 井 5

ゑ 恵 9 \*江 3 倍 4

を 乎 127 (1) 遠 30 (2) 烏 2 \*於 8 (1)

次に仮名遣の違例について、その全用例をあげる。↓の上は正しい仮名遣で、下は本書での違例、……以下は具体的な万葉仮名字母とその頻度とを示す（連読符については右と同様（）内に表示す）。用例の下への（）内には声点の位置を、（<sup>(10)</sup>）内には書紀本文の相当箇所を引き、その下に表出箇所を示した。（なお声点の欄で右側に・を付したものは双点であることを示す）

ひ↓い ……以 4 伊 1

余以乃安比寸留〔當新嘗時〕十一オ 1

伊乃美也余〔新宮〕十一オ 3

遠毛以加祢〔思兼〕十一ウ 2

衣以波岐奈之〔<sup>(1)</sup>無頼〕十四ウ 1

余以奈比之互〔新嘗〕二十オ 6

江↓え ……衣 1

左加衣牟古止〔隆〕二十四ウ 2

江↓ゑ ……恵 1

津久恵毛乃〔机〕三十二オ 7<sup>(11)</sup>

江↓江 ……江 3

安奈宇礼志江也〔意哉〕二ウ 2

久江波良々加須〔覽散〕八オ 6

阿乎比江〔竹刀〕二十七オ 7

江↓へ ……倍 1

津久倍毛乃〔机飢食〕二十六ウ 6

江↓へ ……倍 4

由倍〔故〕六ウ 6・十九ウ 5・二十三オ 6

由保〔倍ノ誤写トミル〕十五オ 5

は↓を ……乎 3

奈乎左牟止之天〔将矯〕六オ 3

非加利 与曾乎比〔光饒〕二十三ウ 4

止乎之呂久知比左岐〔大小之〕二十九ウ 3

お↓を ……遠 22 乎 11 (1)

遠毛久へ上上平〔重〕一オ 5・一オ 7

遠保止万倍〔平上上上平〕〔大苦邊〕二オ 1

遠保止乃知〔平上上上平〕〔大戸之道〕二オ 1



ところで、ヤ行の /je/ とア行の /e/ とは、九世紀中葉頃の訓点資料にその混用のはやい例がみられるが、違例の多くは天暦年間頃迄に混用したものである。本書には、

己々呂太江之〔悶熱〕四ウ 1

也麻奈利遠加保江岐〔山岳為之鳴咆〕七ウ 3

毛江久之乃〔火燼〕二十七ウ 5

衣比止奈利奴〔化成繡陶〕五ウ 1

也牟古止衣須之亘〔不得留休〕十四ウ 4

のような正用例もあるが、先に示した1例のみが違例となる。馬淵和夫博士が『和名類聚抄』で指摘された<sup>(14)</sup>「衣」、語中尾「江」のような傾向は、右の5例にはよくあてはまるが、違例として掲げた「左加衣牟古止」には適用できない。

またハ行転呼音の現象は、そのはやい例を万葉集の「潤和川邊」(巻十一、2478<sup>(15)</sup>)などに求められるとしても、方言や語の個別的な問題などもあり、これが中央語で頻繁になるのは長保年間以降、およそ十一世紀初頭の頃からとされる。本書では、ハ行転呼音の結果のみによって生じたと考えられる仮名遣の混用は、〈えいへ／ほいを〉の7例を数える。

さらに語頭の /o/ と /wo/ との混用例は、そのはやい例を平安前期にみるとしても、これが多く出現するのは、ハ行転呼音の場合同様、十一世紀初頭以降のことで、本書でも〈へおいを〉の33(1)例中31(1)例、〈えいお〉の8(1)例中3例がこれに当る。しかし、語中尾の混用例は、はやい例が院政期頃からあらわれだす程度で、本書で

も助詞の例を除けば、「三乎也」「止保津乎也」「和左於支」の3例である。

一方、/i/ と /wi/、/je/ と /we/ との混用は、語中尾の場合、個別的には十世紀頃からその例をみるとはいっても、頻繁になるのは院政期以降であり、語頭の場合は鎌倉期にまで下るもののようである。

本書では〈へいひい／いひゑ／ゑいひ／いひへ〉の項であげた例(みな語中尾の例、ただし助詞1例)が、ハ行転呼音とこの混用なくしては生じないものである。もちろん、それぞれの語で個別的に仮名遣がはやく乱れたものもある。〈えいへ／へ〉の「由倍」や〈いひゑ〉の「津久恵毛乃」のごときはその類である。

以上の検討から、本書を全体的にみた場合には、院政期以降(十一世紀後半以降)の成立と結論することができ、ほぼ先学の指摘と一致する。しかし、筆者は本書全体を一樣のものとするよりはむしろ、院政鎌倉期あたり迄に成立したいくつかの資料をもとに編集されたという立場をとる。なぜならば、これらの仮名遣の違例が、本書全三十四丁のうちにどのように分布するかを調べてみると、ある程度予想されてくるからである。これらの違例は全丁に一樣に散らばっているかのようにではあるが、全く違例のない部分が二箇所ある。それは、(a)八オゝ十ウ(b)と十六ウゝ十八オとである(付表①参照)。これら二箇所には、「え・い・ゑ」のような用例の少ないものとはかくとして、「ひ」の正用例(a)9(b)9、「ほ」の正用例(a)2(b)3、「お」の正用例(a)6(b)5、「を」の正用例(a)7(b)13を数えるように、決して仮名遣の違例が出ないような

環境にあるわけではない。にもかかわらず、この(a)(b)二箇所には違例が一例として存しないのである。してみると、この二箇所は、比較的古い資料を利用して編まれたのではないかという推定が可能になる。ところで、小林芳規博士によれば、「及」をオヨビと訓ずるのは平安中期以降のことであるという。そして、本書における「及」は(九オ7)と(二十六オ5)とにあつて、いずれもオヨビと訓まれている。そしてさらに、(九オ7)はちょうど(a)の中におさまる。すると、(a)の部分の拠つた資料は、平安中期以前には溯れなくなる。(b)もおそらく同じくらしい資料によつてゐるものであらう。

## 二

次に、『御巫本』の万葉仮名字母について着目してみる。すでにみたように、本書では同一音節について様々な万葉仮名字母をもつものが少なくない。しかし、これらをつぶさに検討してみると、同じ一丁の中でも、「岐」と「歧」とが並行的に使われているという事実がある。本来これら二字は別字であるから当然のことかもしれないが、草体の類似もあつて従来の校訂本などで、この両者に注意したものは少ないようである。また同様なことは、「佐」と「佐」、「左」と「左」にも言える。『御巫本』は、全丁にわたつて髪長吉叟の書写になるものと思われ、同一人が自らの自由な意志で書写したのだとすれば、このような違いはおそらく出てこなかったであらう。これは吉叟が、八十一歳にしては異

常なほどの注意深さで、平野神主家本を書写したためにあらわれた現象で、おそらくは平野神主家本も『御巫本』とほぼ同様な様子であつたろうと思われる。

ところで、「佐」「佐」「左」「左」にはさしたる分布上の問題は看取されないが、「岐」と「歧」との間には特別の分布がみられる(以下附表②参照)。すでに示したように、「き」を表わす万葉仮名は、

支136 岐73(3) 歧48(1) 化7 紀3 枳2(1) 疑1

右の通りである。このうち「化」以下は用例も少ないので、とくに分布上の特色を云々するわけにはいかないが、「支」「岐」「歧」は顕著な特色を示す。「岐」73例が全丁にわたつてほぼ平均に分布する。全く用例のない箇所は、九・十五・十七・二十・三十・三十一・三十四オの六丁半であるが、特に集中するわけでもなく、また分散するわけでもない。ただ三十丁以下において1例しかみられない点はやや気にかかるが、全丁にわたつて広く分布していると言えそうである。これに対して「歧」は全48例(連続符を含めない)中12例がはじめの5丁半に集中し、残る36例は2例を除いて、(二十二ウ)以降に分布する。すなわち、(六ウ)から(二十二オ)までは、(十六オ)に2例あるほか、全くその姿をみないのである。また、今一括して(二十二ウ)以降と述べたが、「岐」の場合同様(三十オ)以降には4例しかなく、この間での「き」は、大部分「支」で表記している。「支」は(二十二オ)から(二十八ウ)までの間に2例しかなく、このあいた部分は、前

述のように「岐」と「歧」とで表わしているが、とくに「歧」が集中的に存在する。以上をまとめて考えてみると、本書三十四丁全体をひとまずおおまかに次の四つに区分できそうに思われる。

- (1) (一オ～六オ)
- (2) (六ウ～二十一ウないし二十二オ)
- (3) (二十二オないし二十二ウ～二十八ウないし二十九ウ)
- (4) (三十オ～三十四オ)

このような分布上のかたよりをどう解釈すべきであろうか。筆者は、やはり本書の祖本の準拠した原資料によるものと考え、

前節で明らかにした仮名遣の違例のない部分は、ちょうど(2)の前半の一部分と後半の一部分に当たっている。

それでは、他の万葉仮名字母の分布に、右のような特徴を見出せぬものであろうか。たとえば「へ」の場合、「安」は全183例が全体にほぼ一様に分布するが、「阿」は(八ウ)から(二十八ウ)までの間に全52例中の49例までが集中する。これは先の(2)(3)に大体重なるわけであるが、これをただの偶然とは見做し難い。また「へ」の場合は、「古」171例が全体的に分布するが、「己」55例は総て(二十九ウ)以前に分布し、「(三十オ)以降、すなわち前述の(4)の部分には全く表われない。へしについては、「之」229例「志」138例が全体に分布して殆どのへしを表わすが、なかに22例「只」をも使う範囲がある。それは(十三オ)から(二十七ウ)までであるが、「只」は(1)と(2)の(a)部分、ならびに(4)には全く分布しない字母である。へたについては、「太」236例が全体に分布するが、

「多」51例はすべて(二十五オ)以前に分布しており、少なくとも(4)の部分には表われない。また「へつ」については、「津」120例が全体に分布するが、「豆」93例は(2)の(b)の部分と(4)の部分実際には二十八オ以降)には分布しない。そして、用例数が5例と少な過ぎる憾みはあるが、「川」は(二十七ウ)以降にのみ分布する。さらにまた「へる」についてみると、「留」145例は全体に分布するが、「流」40例は(十九オ)以前に38例までが分布し、残り2例は(二十三ウ)と(三十二オ)とにあらわれるのである。用例の少ない字母の分布についての判断は、危険が伴うので差控えたが、それにしても、「へき」をはじめとして、「へあ」「へこ」「へし」「へた」「へつ」「へる」の万葉仮名字母の分布には、なにか有意なものがあるように思える。これは偶然というには余りに顕著なかつたより方ではないか。

もちろん、この字母分布の境界線は全く一致するということものではない。しかし、仮名遣の違例のみられない二部分をも考慮してみると、大体次のような六区分ができるのではないかと思う。

- I 一オから八オあたりまでの部分
- II 八ウから十ウまでの仮名遣の正しい部分
- III 十一オから十六オあたりまでの部分
- IV 十六ウから十八オまでの仮名遣の正しい部分(十八ウは本文なし)
- V 十九オから二十七オないし二十九ウあたりまでの部分
- VI 二十七ウないし三十オあたりから三十四オ(終)までの部分

十八	十九	廿	廿一	廿二	廿三	廿四	廿五	廿六	廿七	廿八	廿九	卅	卅一	卅二	卅三	卅四	計
		1					1							1			5 1 1 3 1 4 3 33(1) 8(1)
	1		2		1 11		1	1	1 <sub>(1)</sub>		(1) 1 1 1	12 1			1		
1 1	1 1	24 1	47 1	7 12			1 11		1 2	11 11	2 2		2	13 1	31 <sub>(1)</sub> <sup>5</sup> 2		136 73 48
1 4	3 2	31 1	12 1	11 2	23 2	6 32	44 21	35 2	42 2	22 1	12 1	32	21	21	23	31	183 52
2 1	1 1	31 22	11 11	1 2	17 2	15 1	22 1	31 21	41 1	54 1	21 1	16 1	24	41	21	11	171 55
7 1	2 2 1	66 2 21	26 11 11	52 1 1	64 1 1	45 11 1	23 25 11	35 22 11	34 3 1	44 4 1	45 2 1	21 2 1	68 1	23 32	2 1 1	73 1 1	229 138 22
3 3	3 3	14 1	11 1	34 2	34 3	12 12	21 22	76	8	38	39	62	54	53	71	63	236 51
1	3 1	23 1	21 2	42 2	42 1	41 1	23 2	14 1	32 1		11 11	22 1	33	12	41	33	120 93 5
3	1 1	4	31	11	25 1	31 1	32	21	21	34	32	61	34	16 1	2	12	145 40
								1	1	2		1			1	1	15
1		1	2		1	1	1	11	1	12	12	2	1	2	11		58



付 表

## ① 仮名遣の違例

	一 オウ	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七
ひ ⇒ い											3			1			
に ⇒ え																	
に ⇒ ゑ																	
ゑ ⇒ に		1						1									
に ⇒ へ																	
ゑ ⇒ へ						1									1		
ほ ⇒ を						1											
お ⇒ を	2	5	3	2	1	1	2				1	1		1			
を ⇒ お													1			1	

## ② 万葉仮名の字母

き	{	支	11	1	2	12	2	22	61	24	61	32	25	58	12	12	13	36	4		
		岐	5	23	11	42	25	11	23	12	1		2	23	1	11	1	2	3		
		岐	1	11	1	1	12	22											2		
あ	{	安	8	26	59	109	52	24	45	31	3		21	2	24	21	22	11	18	3	
		阿		1				2				33	14	42	1	11		12	1	2	
こ	{	古	9	10	510	3	42	32	33	52	22	1	11	23	21	4	33	25	2	22	
		己				3	1	3		1	22	41	1	11	11	1	12	2	12	11	4
し	{	之	5		2	12	33	53	24	4	42	3	41	31	64	54	54	51	83	6	
		志	4	38	79	117	47	33	62	71		1	11	21	1	2	21	2	3	1	
		只													1			32	2	2	
た	{	太	6	34	57	56	74	55	28	42	13	22	6	3	13	32	31	3	45	2	
		多	1	1		1		1	1	21	23	41	23	23	2			11	1	1	
つ	{	津	4	23	31	22	1		11	1	1	1		1	25	21		33	25	3	
		豆		1	1	52	68	45	83	16	2	56	23	1	32	11	3	31			
る	{	留	9	44	3	27	42	2	12	31	1	1	12	12	12	12	21	3	1	24	1
		流			1	1	13	12	1	3		1	24	11		21	1	41	12	1	2

## ③

片仮名資料  
先行の証拠

## ④

双点による  
濁音表示の  
ない語

		1			2	1		1	1				1				1											
	4	1			2	1	2	2	1	6	1	3	2	2	1	1		3	1		1							

分 (三十四ウは本文なし)

そして、以上述べてきた各字母の特徴的分布は、これら六区分の組合せによって説明がほばできるものである。

### 三

次に本文を検討するうえで、『御巫本』の祖本が資料としたもののなかに、片仮名の資料があったらしいことが西宮一民氏によって指摘されている。<sup>(17)</sup> それによれば、次のような例が片仮名先行を思わせる問題箇所である。

- ① 會一面 比止津遠志。不。尔安比豆 (二ウ<sup>2</sup>) …… \* モーシー志。 テーフー不。
- ② 脹沸虫流 字介和岐旦宇志太加流 (五オ<sup>5</sup>) …… \* ナーケー介。
- ③ 令吾耻辱 安禮萬志豆 (五オ<sup>7</sup>) …… \* ラーマ→萬。
- ④ 遂建 乎。豆和太須 (五ウ<sup>4</sup>) …… \* ターヲ→乎。 (旦→豆)
- ⑤ 構幽宮 加久禮宇。遠津久流 (七ウ<sup>3</sup>) …… \* ヤーウ→字。
- ⑥ 和幣 尔敏知 (十一ウ<sup>4</sup>) …… \* テーチ→知。
- ⑦ 當爲女 女乃己字。良牟 (十五オ<sup>3</sup>) …… \* ナーウ→字。
- ⑧ 頭糙 加保。豆知 (二十七ウ<sup>6</sup>) …… \* フーヲ→ホ→保。
- ⑨ 母誓已驗 伊呂波。須留尔伊豆之呂之 (二十八ウ<sup>3</sup>) …… \* チーテ→旦。

⑩ 無目堅間 末奈之加太未乎 (三十ウ<sup>1</sup>) …… \* マーアーミ→未。

⑪ 他婦 乎。之乎未天 (三十三オ<sup>4</sup>) …… \* ターヲ→乎。 ナーテ→天。

従つてもと (ア) タシヲミナとあったもの。

⑫ 捫腰 古之乎毛豆。布 (三十三ウ<sup>7</sup>) …… \* チーテ→旦。

これらのうち特に⑥⑨⑫などは説得力に富み、確かに片仮名文献の先行を思わせるが、⑦は「奈」の草体を「字」と誤写した可能性もなしとしないし、⑩は「未」と「末」という漢字間の誤写であるとも考えられる。しかし、片仮名文献の先行を説く西宮説は動かせぬところで、注意して本書を検討してみると、さらに次のような例を加えてもよいように思われる。

⑬ 不須相見 安比不。倍加良須 (七オ<sup>3</sup>) …… \* ミーアーフ→不。

⑭ 永壽有如磐之常存 以乃知察加岐乎止 (コト<sup>2</sup>二十七オ<sup>2</sup>) …… \* コーヲ→乎。

⑮ 己鈎鈎 於不。加知乎 (二十八ウ<sup>7</sup>) …… \* ノーフ→不。

ところで、いま問題の残ることを承知したうえで、一応これら15例を片仮名資料先行を物語る証拠と見做し、本書全三十四丁のどの部分に分布するかを検討してみる(付表③参照)。すると、その分布は前節のⅡⅣⅤの部分にはなく、ⅠⅢⅥの部分にのみみえることが明らかである。とくにⅡⅣの仮名遣上の違例のみえない部分に、これらの例が分布しないということは、おそらくこれら

の部分は、万葉仮名書きの資料に準拠したのではないかという可能性が高く、このことからⅡⅣの二部分が比較的古い、誤りの少い資料を使用して成立したのではないかということを容易に推定させる。

#### 四

以上三点から、『御巫本』の祖本の成立には、平安中期以降のいくつかの資料が用いられたらしいことが推定された。そして、全体を前述のようにⅠからⅥの六つに区分してみると、仮名遣の違例の分布やいくつかの万葉仮名字母の分布、さらには片仮名書き資料の先行を思わせる誤写の分布が、それらの区分の組合せによって、ほぼ説明できることがわかった。これらのことは、『御巫本』の国語史資料としての性格上重要なことであると思われる。

ところで、本書に数多く差された声点については別稿に譲る<sup>(18)</sup>が、双点による濁音表示の有無については、ここで少し述べてみたい。

本書における声点は、墨点の上に朱点が重なっているのが主で、一部朱墨の差声に違いのみられるものが出てくる。この朱墨それぞれの声点の性格については、未だに結論を得ないが、いずれも濁音を表わす場合に双点を用いることがあるということは確かである。ところが、ここに明らかに濁音と思われる仮名に単点しか差されていない例が多くみられる。

例えば「あぐ(上・拳・揚)」の第二音節は濁音であることはまず間違いない。そこで本書にてくる用例についてみると

遠久里安介牟止志天(へ上上平平上上平上平)三ウ7  
のように単点しかないものも出てくる。また

遠久里安介津(へ上上平上(朱平上)上)四オ1

のように朱で双点を差しているが、その前の墨は単点である場合も出てくる。このようなことから、濁音に対して双点を差したものと、そうでないものが、本書の準拠した原資料にあったのではないかと考えられる。清濁の問題は決定し難い語があつて簡単にはいかないが、次の諸語について、双点による濁音表示の有無を調べてみた。いま一応朱墨いずれかが双点で差されていれば、濁音表示のあるものとして処理してみると、次のような結果を得る。「」内の上段の数字は双点による濁音表示のあるもの、下段はこれのないものの数を示す。なお、語形は濁音形で記した。

あぐ(上)〔5―1〕、あふぐ(仰)〔0―1〕、いづ(出)〔14―1〕、  
いまだ(未)〔1―1〕、うかがふ(窺)〔0―2〕、うずめ(鈿女)  
〔0―1〕、おもぶる(從容)〔0―1〕、おらぶ(叫・啼哭)〔0―1〕、  
かうぶる(被)〔0―1〕、かぎり(限)〔0―1〕、きざし  
(雉)〔0―1〕、ことど(絶妻之誓)〔0―1〕、ことよさす(言  
寄)〔1―1〕、しばし(暫)〔0―1〕、すでに(已・既)〔3―1〕、  
たびろかす(飄掌)〔0―1〕、とどま(詛)〔0―2〕、とどこほ  
る(滯)〔0―1〕、とどまる(留)〔1―1〕、とどろく  
(轟)〔0―1〕、とどろかす(轟)〔0―1〕、とびら(扉)〔0―

1、なむぢ(汝)〔2—2〕、はじめ(初・始)〔4—1〕、まうづ  
(詣)〔2—2〕、みぞ(御衣)〔1—1〕、みちびき(導)〔0—1〕、  
もがり(殯)〔0—1〕、もごよふ(透)〔0—1〕、やたかがみ  
(八咫鏡)〔0—1〕、やどる(宿)〔0—1〕  
また附屬語では左のような結果を得た。

が〔17—3〕、ごとし〔3—2〕、ず〔21—9〕、ぞ〔9—5〕、  
ども〔3—1〕、べし〔8—1〕、まで〔1—2〕

そこで、これら双点による濁音表示のない例(単点の例)が、  
本書全三十四丁の中にどのような分布を示すかを検討してみれば、  
声点の性格の一端を明らかにすることができるとは思われる。  
そして、もし先に仮名遣や万葉仮名字母についてみられた六区分  
によって説明できるような分布であれば、本書の祖本は、各資料  
から声点付和訓のかたちで編集されたのではないかと推定も  
成立する(付表④参照)。しかし、実際はこの分布にⅠからⅥの  
区分で説明できるような傾向は見出せなかった。むしろ全体に散  
らばっていて、和訓そのものと声点とは一緒に論じられないよ  
うな事実を示した。<sup>(19)</sup>このことは、声点は本書の原型がある程度整  
ってから差されたものではないかということを思わせる。

## 五

最後に『御巫本』の形式の不揃いであることについて述べよう  
と思う。すでに安田尚道氏も指摘されたように、<sup>(20)</sup>本書は、一部例  
外はあるとはいえ、最初から(八オ5)までは傍注形式をとり、

それ以降は割注形式をとっている。これにともない各項の間隔に  
も相違がみられるし、一行の字詰や行末のアキなどにも差があ  
る。これはいいか悪いかを意味するのであろうか。最初  
から(八オ5)までの間は、本稿でいうⅠの範囲とほぼ重なるか  
ら、準拠した資料の違いを反映したものと考えられるが、(八  
オ6)すなわち割注形式になった一行目に

久江波良々加須〔寛散〕<sup>(21)</sup>

のような仮名遣の違例をみるので、必ずしも準拠した資料の問題  
だけとも考えられないようである。

ところで、この傍注形式と割注形式とは、いったいどちらが古  
いのであろうか。もちろん、日本書紀の本来の注は割注であるか  
ら、割注形式の方が古そうである。しかし、本稿の検討からも明  
らかなように、本書は平安中期以降のいくつかの資料を利用した  
ものらしく、それらの調が割注形式だったとはちょっと考え難い。  
むしろ傍注形式の方が普通だったのではないか。それを本書の書  
写の過程で割注形式に整理統一していったものと思う。本書と同  
系統の写本とみられる『彰考館本』<sup>(22)</sup>は、延宝六年に日野家所蔵本  
を書写したものであるが、この本は全体が割注形式であって、  
『御巫本』よりも形式的には整理された様子をみせている。『御巫  
本』(一オ3)の「眞滓」に付された

安加久良仁之天

という訓も、語義未詳ながら弘安本・水戸本<sup>(23)</sup>によると

保乃加余之亘 太々乎比天

と同じく「眞滓」の訓として掲げられている。したがって、『彰考館本』で「渾沌」の訓に「安加多良仁之旦」とあって、「眞滓」のすぐ右に並んでいるのも、割注形式に整備する際の誤りとみられる。<sup>(24)</sup>

以上、『御巫本』の成立について、仮名遣の違例や万葉仮名字母、片仮名資料の先行を思わせる例や双点による濁音表示の有無といった観点から、それらの分布を考察し、さらに『御巫本』の形式を整えたものが『彰考館本』であろうという推定を試みた。今後『御巫本』については、訓の系統を知るうえで、日本書紀諸本の訓との比較検討が必要である。また、声点やそれによって知られるアクセントの問題も未解決の部分が多い。これらの点については後考に俟ちたいと思う。

- 注(1) 神宮文庫蔵【5】274號一冊 受入番号 23899 複製本としては、古典保存会複製本(橋本進吉解説・昭和8—8)と神宮古典籍影印叢刊2『古事記・日本書紀 下』(粕谷典紀解説・昭和57—4)とがある。
- (2) (アクセント史資料索引二、アクセント史資料研究会刊・昭和59—4)
- (3) ↓注(1) 古典保存会複製本解説。
- (4) 小林芳規「日本書紀古訓と漢籍の古訓読——漢文訓読史よりの一考察——」(『佐伯梅友博士 国語学論集』 表現社・昭和33—6)
- (5) 大野晋「日本書紀の訓読について——日本書紀私記の仮

名遣の検討——」(『国学院大学日本文化研究所紀要』17・昭和40—9)『仮名遣と上代語』に再録、岩波書店・昭和57—2)

- (6) 西宮一民「日本書紀私記、乙本・丙本について」(『国語国文』三八—10・昭和44—10)『日本上代の文章と表記』に再録、風間書房・昭和45—2)

- (7) 安田尚道「『日本書紀私記(乙本)』の成立について」(第26回訓点語学会研究発表・昭和47—5)

- (8) A(一オ〜ハオ7) B(ハウ〜十ウ1) C(十ウ2〜十八ウ) D(十九オ〜三十四オ)

- (9) 「紀」ないし「起」の草体から生じた誤写であるかもしれないが、一応ここに収めた。

- (10) 本書の声点は、後述するように墨点の上に朱を重ねたものが殆どである。ここでは特に注記しないが、朱墨が重なっているものとする。

- (11) 大坪併治「訓點語の研究」64べ (風間書房・昭和36—3)

- (12) ↓注(5) 大野晋「日本書紀の訓読について——日本書紀私記の仮名遣の検討——」

- (13) 以下の仮名遣についての考察には、左の文献を参考にした。

- 築島裕『平安時代語新論』(東京大学出版会・昭和44—6)

- 馬淵和夫『国語音韻論』(笠間書院・昭和46—4)

- 奥村三雄「古代の音韻」(『講座国語史』2 音韻史・文学史)所収、大修館書店・昭和47—9)

- (14) ↓注(13) 馬淵和夫『国語音韻論』50べ

- (15) 本文は佐竹昭広他共著『萬葉集 本文篇』(塙書房・昭和47—3)による。

- (16) ↓注(4) 小林芳規「日本書紀古訓と漢籍の古訓読——漢

文訓読史よりの一考察——」

(17) ↓注(6)西宮一民「日本書紀私記、乙本・丙本について」

(18) 拙稿『御巫本日本書紀私記』所載の体言のアクセント

(『国文学研究』85・昭和60—3)

(19) 金田一春彦『国語アクセントの史的研究 原理と方法』

(稿書房・昭和49—3) 224べに「声点は、発生を異にするもので、もっとあとのものと考えられる」とある。

(20) ↓注(7)安田尚道『日本書紀私記(乙本)』の成立について

(21) 「蹴る」については、浜田敦『蹴る』と『越ゆ』(『国語と国文学』二六—8・昭和24—8／『日本語の史的研究』

に再録、(臨川書店・昭和59—8)に詳しい。

(22) 彰考館蔵 引出番号丑三 複製本としては、『新訂国史  
00524

大系』8 (黒板勝美校注・昭和7—2、吉川弘文館・昭和40—1)

(23) ↓注(6)西宮一民「日本書紀私記、乙本・丙本について」

(24) 『彰考館本』にはこの部分次のようにある。

渾沌萬呂加礼多留古止  
安加多良仁之豆

眞保乃加爾之豆  
太々與比天

本稿は、昭和五十九年一月十四日、早稲田大学国語学会で口頭発表した原稿に手を加えたものである。また、原本閲覧につき、神宮文庫・彰考館当局および皇学館大学教授西宮一民氏のお世話になった。厚く御礼申し上げる。